

二〇二一年度 深浦円覚寺古典籍保存調査プロジェクト成果報告会

弘前大学深浦エコサテライトキャンパス 令和三年度特別公開講座「

寺院資料調査から地域文化振興を考える

— 深浦円覚寺古典籍聖教の県重宝指定によせて —

【特別講演1】

昔の人がのこしてくれた文字と紙

— 深浦円覚寺の古典籍調査と青森の未来 —

大正大学文学部教授

前弘前大学人文社会科学部教授 渡辺 麻里子

「1」はじめに

皆様、こんにちは。それでは、講演の一番目ということで、私、渡辺が三〇分のお時間を頂戴して、話をさせていただきます。お手許には、レジュメ資料七頁のものをお渡ししておりますが（稿末19頁に添付）、この発表に関しましては、パワーポイントのほうで映しながら、これに沿って進めてまいりたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。改めまして、弘前の皆様、深浦の皆様、大変お久しぶりでございます。本来、今日のフォーラムは、弘前に皆で大集結して弘前大学みちのくホールを満席にし、円覚寺聖教が県の重宝指定を受けた喜びを皆で分かち合おう、という目論見だったわけですが、残念ながら、この社会情勢下におきまして、ホールに集まれず、また私自身このように離れたところから話をさせていただきす。その失礼をどうぞお許しください。（ただいま、東京・大正大学からオンライン参加をさせていただいております。）

さて、早速ですが、本日の話を配布資料に沿って進めてまいりたいと

思います。

先ほど原先生が、「文化資源」という言葉を何度かおっしゃいました。青森の文化資源（文化財）として有名なものは、三内丸山遺跡に始まり、弘前城、ねぶた・ねぶた祭りなどが大変有名ですが、本日の話は、あくまでも文字の資料、昔の人が書いたものに絞って考えて参りたいと思います。私の講演のタイトルも「昔の人が残してくれた文字と紙」といたしました。こうした紙の資料、文字の資料というものも、地域の宝であり、そして、おおいに文化資源になり得るのだという方向で話をさせていただきます。

古典籍資料、文字資料というと、皆様は何を思い浮かべるでしょうか。今日の私のパワーポイント資料には『鳥獣戯画』から取りました蛙の絵がしばしば登場しますが、この高山寺蔵『鳥獣戯画』の絵巻は国宝ですし、また真福寺蔵『古事記』、これは後でご講演なさる阿部泰郎先生が手掛けておられる大須観音真福寺の聖教調査の、真福寺蔵本なのですが、その『古事記』も国宝に指定されておりますように、文字資料にも国宝というものがございます。このような観点から、今回、深浦円覚寺ご所蔵の聖教が県重宝の指定を受けました。「円覚寺の真言・修験、聖教類及び文書」という名称で、二・三・五点が一括指定を受けたということになります。ご所蔵の円覚寺様、そして、この調査に関係したすべての皆様と、共に喜びを分かち合いたいと思います。「県重宝」の指定、お慶び申し上げます。

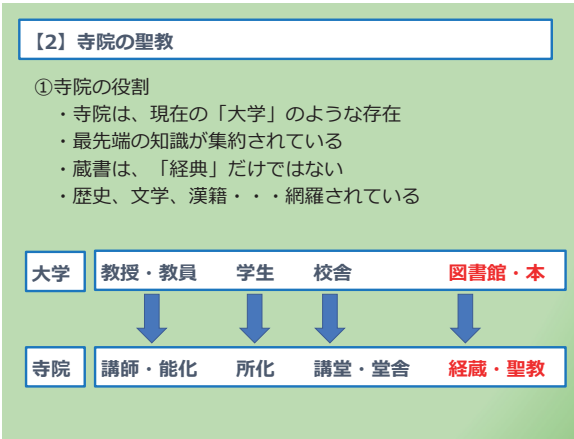
先ほどご紹介いただきましたので、ここは飛ばしますが、私は、二〇〇六年から二〇二〇年の十四年もの間、弘前大学でお世話になり、在職中に、様々な勉強をさせていただきました。その中で、二〇一七年より、深浦円覚寺様のご厚意で、円覚寺ご所蔵の貴重な御本を調査させていただきました。私にとって大変貴重な勉強であり、貴重な経験でした。東京に移動した後も、まだまだ調査を継続する予定でおりま

したが、現在東京在住の私は、残念ながら、コロナの感染拡大により、青森になかなかうかがえなくなっていました。

専門は中世文学・仏教文学・説話文学などですが、寺院資料調査を主な研究としています。つまり寺院の聖教を調査しながら、中世文学を解明するという立場です。これは後でご講演なさる阿部泰郎先生を始めとした多くの先達の先生方に学びつつ、後を追いかけてながら研究をしてきたものです。私の場合は、どちらかというと天台宗寺院を専らにしていたので、深浦円覚寺の真言聖教には戸惑いましたが、これまでの経験を活かして、円覚寺の調査をさせていただきました。

津軽の地に赴任してから、各地で調査をしておりますが、なかなか中世資料を見ることができずにおりましたところ、円覚寺で鎌倉写本に出会うこととなりました。円覚寺で初めて本を見せていただいたときの衝撃は、今でも忘れることができません。

青森県報 第294号		教育委員会		
位	職	延	長	編
七の	の	七	七	七
七の	の	七	七	七
七の	の	七	七	七
七の	の	七	七	七



〔2〕寺院の聖教

今日ご視聴の皆様にはいろいろな立場の方がおられ、中には高校生も参加して下さっているとうかがいましたので、ご専門の先生方には少し退屈なところもあるかもしれませんが、話の前提として、まず、お寺の聖教とは何かについてお聞きいただけたらと思います。

お寺が持っている本というと、「お経（経典）でしょ？」と思われている方が多いと思います。これは間違いではないのですが、寺院が所蔵している本は、多岐にわたります。長い歴史の中で、寺院は、たとえば言えば、現在の「大学」に近いと思います。また、お寺に本があるとか、お寺で勉強していたという、「寺子屋でしょ？」というイメージを想起する方も多いと思います。そうした側面もあるのですが、私どもが研究しているのは、現在の大学のような役割を負った学問所としての寺院で、勉強といっても、子供の初学者の学問ではなく、最先端の知識が集約されている最高峰の場所ということになります。また先ほど申しましたように、寺院の蔵書というのは経典だけではございません。歴史、文学、漢籍、あらゆるジャンルのものが網羅されているのです。総合大学の図書館をイメージいただければと思います。

上の図を御覧下さい。現代の大学と古典世界の寺院の役割について、記してみました。矢印の対応を見ていただきたいのですが、大学では、教員がいて学生に教えます。校舎があつてその教室で講義が行われ、図書館には多くの蔵書があります。同じように、寺院にも教員の役割をすける講師・能化がいました。大学の学生に当たるのは、寺院の場合は、所化と言います。大学の校舎・講義室に当たるものは寺院では講堂になります。そして、今回のテーマの図書館に当たるものがお寺では経蔵、納められている本を聖教などと称します。この経蔵に収められた本たちが、今回の円覚寺調査の対象になっているのです。

今、現在の大学に置き換えられると述べましたが、一方で、聖教について

て、現在と大きく違う点があります。今は本というのはどこにでもあり、ブックオフでもアマゾンでも簡単に買うことができます。ご自宅にある本も、かさばって邪魔だと、どんどん処分される時代です。また複写（コピー）も簡単にすることができます。さらに最近では、学生さんたちの勉強の仕方を見ていると、コピーする一〇円ももつたいないと、スマホのカメラで写真を撮るようになります。こうして本は、簡単にその内容を自分の物にすることができます。

ところが、古典的世界においては、本というのは非常に特別なものでした。これをまず大前提に考えることが大変大事になります。本とは貴重な情報が書いてあるものですから、人に簡単に見せたり、渡したりするものではありませんでした。「〇〇という本が欲しい」と思っても、それを手に入れることは容易なことではありませんでした。努力が実り、何かご縁があつてようやく見せてもらうことができた時には、許されたわずかな時間に一生懸命写します。そしてそれを今度は自分のお寺に持つて帰れば、今度はそれをなくさず、散逸させず、次の世代に伝えていこうとする訳です。こうして入手の過程には、様々な困難があつたのです。

ここに一つの例を示します。茨城に月山寺というお寺があります。ここに昔所蔵されていた『直雑』^{しきぞう}という、天台宗で大変重要な本についてのエピソードをご紹介します。月山寺の第二世尊栄という学僧は、『直雑（雑々私用抄）』が大変重要な本であると聞いていたようで、何とかしてこの本を見てみたいと思っていました。宝徳三年（一四五二）のこと、比叡山に行く折があり、この機会に何とか比叡山の僧侶に頼んで、この本を書写することができました。そのために、「随分の施物」をしたそうです。つまり多くの贈り物、加えて多くの金銭もお渡しし、さらには山王大師に一生懸命祈ったところ、この念願が叶ったということ、その喜びが、『直雑』の奥書に記してありました。ところが残念な

ことに、全部で二十四巻の内、第十八巻の一卷だけが不足していたので、す。しかしこの時は、無念にも山を下りざるを得ませんでした。

この後、尊栄は『直雑』の残る一卷を書写して完成させたいという願いを持ち続けますが、すぐには叶いませんでした。やっと実現したのは、なんと文明十六年（一四八四）六十六歳の時でした。もう一度比叡山に行く機会に恵まれ、ようやく残った一卷を写させてもらうことができた訳ですが、最初の書写から何と三十三年も後のことだったので。

このように、本を手に入れることは、まず見せてもらうことが困難だったので、見せてもらえた時には、それを喜びとして丸々全部を一生懸命に写すこととなります。今、中学生や高校生には、古文の授業の予習に、教科書をノートに写すという宿題が出るかと思えます。『伊勢物語』全部を写してきなさいと言われたら、どうでしょうか。「えーっ」と猛烈な反対の声があふれるのではないのでしょうか。しかし古典的世界の場合は、見せてもらえること、まして写す許可をもらえることは、特別な喜ばしい事だったので。

書写にまつわる別の例をお示ししましょう。本を写した最後には、奥書と言って、何時、誰が、どこでどのような本を写したのかなどという基本的な情報が記されるのですが、そこには時折、本を写した人の様々な感想が記されることがあります。ある本の場合は、「写し終わったときに明け方の鳥の声が聞こえた」とありました。これはもうお分かりでしょうか。徹夜をしてしまったのですね。それから、これは高野山での出来事でした。「寒くて硯の水が凍ってしまい、うまく書けなかった」という嘆きが書かれていました。寒くて本当に大変そうです。シュッとコピー、カチャッと写真が撮れない昔は、このような世界だったので。こうした本をめぐる世界観というものを共有していただいたところで、次に、実際に深浦円覚寺の本の話に移って参りたいと思います。

〔3〕深浦円覚寺の概要

まず、深浦という場所についてです。地図を載せておきましたが、青森県の西の端、西海岸に当たります。深浦の港は、地形の上で大変よい港で、北前船などの寄港地にもなっていました。海に沈む夕日の美しい場所です。弘前の西方に深浦があり、両者の間に岩木山があるという関係です。

円覚寺の創建は古く、大同二年（八〇七）に坂上田村麻呂が蝦夷征伐の折に観音堂を建立、また貞観十年（八六八）に修験者の円覚が開基したと伝えられています。

宗派は真言宗醍醐派です。空海の開いた真言宗で、資料に法流を記しましたが、醍醐寺の三寶院流ということになります。醍醐寺は京都市伏見区にございます醍醐派の総本山で、貞観十六年（八七四）に聖宝が創建、延喜七年（九〇七）に醍醐天皇の御願寺となりました。醍醐寺所蔵の御本は全部で一〇万点ほどあるということですが、そのうち、現在、七万点の聖教が国宝に指定されております。この醍醐寺の御本は、後ほどお話ししますが、深浦円覚寺に伝来し、関係しております。

三寶院は醍醐寺の一院です。大規模寺院には、何々院という子院を多く有し、お寺はいわば集合体で形成されています。醍醐寺の三寶院は修験道当山派の本山として大きな力を持っている寺院です。

円覚寺は聖教の他にも多くの御寺宝をお持ちです。写真は、非常にきらびやかな薬師堂の厨子になります。非常に美しい細工が施されていて、現在、国の指定重要文化財となっているものです。

それから円覚寺は、海洋交通の要ということで、本尊の観音様は海上航行の安全を祈願されました。奉納絵馬などこうした一群の「円覚寺奉納海上信仰資料」は、昭和五十六年（一九八二）に「国重要有形民俗文化財」の指定を受け、さらに平成二十九年（二〇一七）には日本遺産に認定されました。写真は、非常に印象深い、鬘まげが奉納されたもの

奉納された まげ額



- ・航海は危険を伴う。
- ・無事に航海をし終えた者たちが御礼に奉納した

多くのご寺宝 薬師堂厨子（国指定重要文化財）



- ・薬師堂の棟札に永正3年（1506）の記
- ・薬師堂厨子は至徳二年（1385）の銘がある
- ・藤原基衡の寄進
- ・豪華な装飾が見事

毛髪刺繍の仏涅槃図



- ・毛髪で刺繍した仏涅槃図。
- ・釈迦入滅を描く
- ・周囲を弟子が囲み、動物たちも集まって悲しむ

円覚寺の奉納絵馬



- ・航海の安全を祈願
- ・航海の無事を報告
- ・荒れた海が描かれる
- ・「円覚寺奉納海上信仰資料」→日本遺産に認定

です。その他にも、「毛髮刺繡涅槃図」ですとか、様々な御寺宝がある中で、今回は和本（聖教）に注目していきたいと思えます。

深浦円覚寺に所蔵される聖教ですが、全体で約五十箱の聖教があります。この度、「県重宝」に指定されたのは、その半数、二十五箱、二一三五点ほどになります。大変多い数と思われるでしょうが、実際には円覚寺所蔵本の半分程度で、円覚寺にはまだまだ多くの聖教があります。

今回、指定を受けた聖教を含め、円覚寺所蔵資料について、その特徴と意義を、六点にまとめてみました。以下、順に説明します。

まず第一に、円覚寺所蔵資料の中には、中世にさかのぼる写本群がありました。鎌倉時代や南北朝時代、室町時代の写本です。今日、奈良や京都からご参加の方は、中世で古いと言うと、フツツと笑われるかもしれませんが、北東北においてまた青森において、鎌倉時代の写本というのは非常にまれな資料ということになります。この古さという点で、重要だと言えます。

第二の注目すべき点に、本の来歴があります。円覚寺所蔵聖教の中には、奈良や京都の大寺院の旧蔵書というものが含まれていることがわかりました。実際に、具体的な写真をお見せしますと、例えば、『三蔵法師袈裟図』を御覧下さい。九条袈裟、五条袈裟の図がありますが、いずれも鎌倉時代の写本となります。これには包紙があり、それには宝暦八年（一七五八）の海龍王寺第五十六世高瑜の識語がありました。識語を記した包紙にくるまれた状態で、鎌倉時代のものと思われる「袈裟図」が円覚寺に所蔵されているということになります。

◎三蔵法師袈裟図 →鎌倉時代写本



【4】深浦円覚寺聖教の概要

①総量

- ・深浦円覚寺所蔵古典籍は全約50箱
- ・そのうち25箱（2135点）が「県重宝」の指定を受けた



◎三蔵法師袈裟図 「包紙」



I 古い II 奈良・京都の大寺院の旧蔵聖教

- ・1~5箱
- 中世・近世真言聖教



また、次は『大師御行状集記』の写本です。寛治三年（一〇八九）に東寺三十五世長者経範が集記した空海の伝記で、写本は数点ありますが、円覚寺のものは大変古い写本である上、全百三条をそろえた完本です。表表紙の見返に「金剛仏師文海」という署名が確認できます。（写真参照）この文海（一二九三〜一三六一）は、上醍醐寺釈迦院に住した僧です。つまり本書は、醍醐寺にいた、鎌倉から南北朝にかけて活躍した僧侶の署名のある本で、写本はそれよりも古いものということが確認できる訳です。

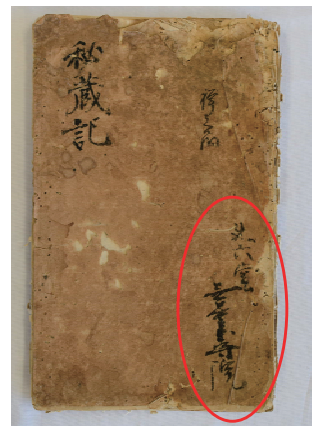
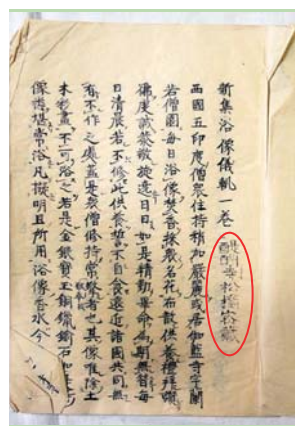
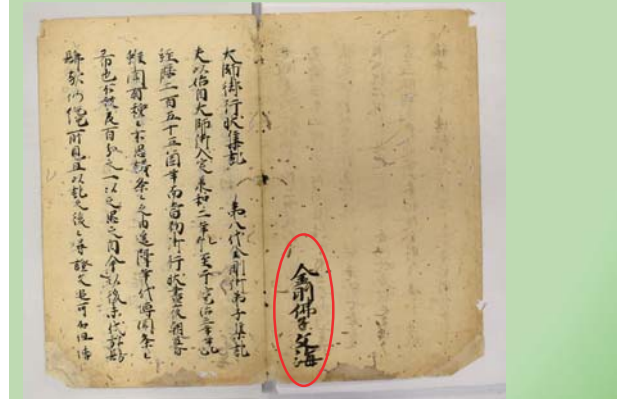
次は『秘藏記』と言われる本ですが、これも鎌倉時代の写本です。表紙に「丈六堂無量寿院」と署名があり、醍醐寺の一院の旧蔵本であることが知られます。（写真参照）こうした御本が深浦円覚寺から見つかったのですが、これを初めて見たときには本当に驚きました。

この他、旧蔵印という判子（印鑑）の例をお話しします。かつて本を所持していた者が、自分の所有物であるということを示す判子を本に押すことがあります。この場合、蔵書印によって元の所蔵者が分かり、現在に至るまでの本の伝来が示されることになります。この印により、本の人生というか、本の一生というか、本の来歴が、こうした蔵書印によって分かるということになります。下の写真の場合、「醍醐寺松橋密蔵」という墨印があり、この印によってこの本が醍醐寺旧蔵本であることがわかります。

続きまして、第三の修験道関係資料です。非常に貴重な本が数多く見つかったこと、点数の多さに加え、ひとかたまりの一群の書として見つかったことをご報告したいと思います。

修験道に关しましては、円覚寺二十六世の海浦義観という方が非常に著名です。海浦義観（一八五五〜一九二二）は、中野達慧が『日本大蔵経』の「修験道章疏」を編纂する際に、当山派の修験資料の底本とし

◎大師御行状集記

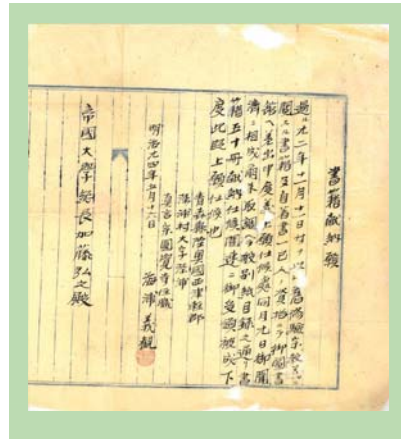


て、円覚寺所蔵資料を使っていただくよう、多くの本を提供しました。現在の私たちは何気なく『修験道章疏』を使用しておりますが、よく見ていただきますと、書目の最後の奥書には、深浦円覚寺・海浦義観の名前がしばしば出てまいります。義観は、修験宗の再興独立請願などを行った人物としても有名です。

また次の資料は、海浦義観が、修験宗に関する書籍や自分の著作物を帝国大学（現在の東京大学）に献納するための願書です。明治二十四年（一八九二）五月一六日に記した、帝国大学総長加藤弘之宛の手紙の下書になります。こうした一群の資料も残っております。

III 修験道関係資料

- ・6～20箱……歴代住持
- ・修験道関係書
- ・津軽寺院のネットワーク
- 歴史や文化が解明



海浦義観は、父が尊海、祖父が尊岸という人物です。次にこの円覚寺第二十四世尊岸に注目したいと思います。円覚寺の聖教調査の結果、修験道関係書として、義観の醍醐寺での収書や、義観自身の著書と草稿類などが、多数発見されました。そのことも大変貴重なのですけれども、義観の学問の素地として、実は、義観の祖父、尊岸の代に、すでに相当の修験資料が集められていたことが判明いたしました。尊岸の修験関係書というものが一群となって発見され、新たなことが多数わかったのです。円覚寺は本の保存が大変よく、一般にはこうしたまごました本はすぐに行方知れずになってしまふことが多いのですが、円覚寺には、修験関係の切紙印信類がまとまって残されていたのです。

特に注目したいのは、切紙という方法で伝えられる一つ一つの諸法です。それぞれ一紙一枚の紙で伝授するものです。尊岸は、自分が伝授された切紙を改めて書写して冊子を作ります。これは推測ですが、なくさないようにということか、あるいは後に伝えようとしたためか、自分で

写し直して冊子の形態に整えたようです。最初の書写は、十九歳から二十歳頃のときに書写編集します。そして尊岸は再度、五十九歳から六十四歳の頃になってから、もう一度書写編集し、新たな冊子に作り直すということをいたします。

その結果、一つの印信について、①一枚ものの切紙の状態、②若い時に書写を行い冊子にしたもの、そして、③年がたって、もう一度編集して作り直した冊子、この三種類が同時に残されました。

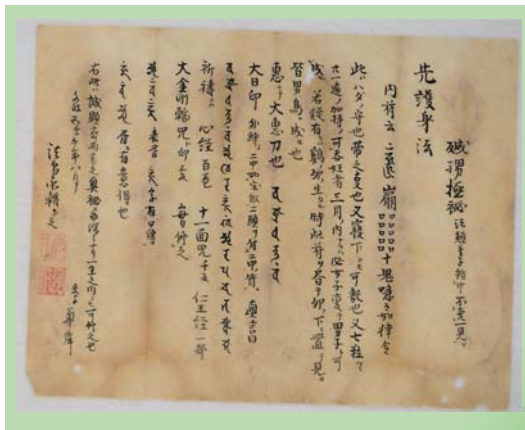
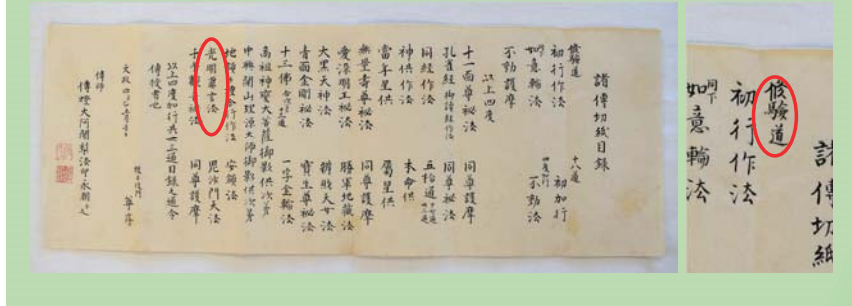
次の目録も大変貴重です。これは何を伝授されたかという一覧になっています。よく修験と真言密教の区分が非常に難しいと言われるのですが、この伝授目録は、中に「修験道」というふうになぜわざわざ注記しながら、密教の修法と修験の書が取り混ぜて書かれていることがわかります。文政五年（一八二二）と年記が記され、また永朝から尊岸に授与されたことも記されていて、いつ、誰から誰にということが明確で、その内容まで分かり、かつ伝えられた現物まで残っているという、伝授の実態を示す非常に貴重な証拠であると思います。

一枚物の切紙をお見せしましょう。写真は、「乗船大事」の法です。「乗船大事」の題名の右下には「三秘事」とあり、これは秘密の法であると記します。また左側には、「千金莫伝（千金伝ふなかれ）」、つまり「お金を積まれても見せてはいけませんよ」という注意書が書いてあるのです。絶対に秘密で、大事に守りなさいということです。

それから、諸法には様々なものがございまして、現実的なこととして、お産に関する法が多く見受けられます。安産を祈る他、お産を早くしたい、あるいは遅くしたいという諸法です。写真の「変成男子秘事」という法は、母親のお腹の中で、生まれてくる子供を男子に変えたいという祈願をする時のもので、その秘法が伝えられています。こうして、修験関係書においても、様々な内容が伝えられているのです。

修験関係書については、内容に加えて、尊岸がどこの誰から法を受けた

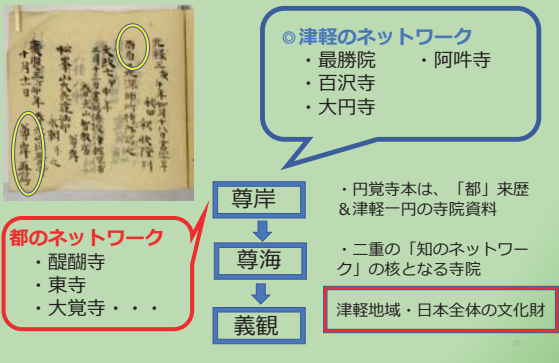
諸尊法伝授切紙目録 諸尊法伝授切紙目録



かということも重要になります。尊岸は京都や奈良のような中央の大寺院ではなく、津軽一円の様々な寺院の色々な師匠から学び、伝授を受けています。現在、津軽においては廃寺、つまり今は無くなってしまうと跡が追えなかった寺院で伝授を受けていることも多くありました。その結果、尊岸の修験資料は、津軽の寺院の歴史を知るための情報が多く有されているため、青森の寺院史を解明する、津軽の皆様にとっての貴重な歴史資料でもあるのです。

ここまでのところを一度まとめますと、円覚寺の所蔵資料は、地方の

(2) 修験道関係聖教



◎ 朝鮮版



寺院と都の寺院とのネットワークといったものを示す資料でありました。円覚寺の資料というのは、聖教として、内容も重要ですが、来歴をたどっていったときに、津軽地域の宗教史、また、日本における宗教史を解明する核となる寺院であるということが考えられるのです。ですから、今回は「県重宝」ということで、県の宝物と認められた訳ですが、広く考えましたら、これは日本全体にとっても、もっと言えば、世界にとっても重要な宝ということが言えるかと思えます。

第四に、朝鮮本があります。朝鮮の版本・写本なども大量に残されており、これも大変貴重なものになります。これは円覚寺第二十六世海浦義観の弟の篤弥（一八六九〜一九二四）が明治二十三年末から京城に渡り、京城商品陳列所で主任を務めていた関係で、これらの本は篤弥を紹介して入手したものと考えられます。これらの本も貴重です。

こうして今回指定を受けた本の意義を、粗々述べてきました。内容における貴重さはもちろんのこと、伝来など、本が負っている歴史を含めて、様々なレベルで重要だということを御理解いただけたかと思えます。

なお、最初にも述べましたが、今回指定を受けたものは、円覚寺ご所蔵本の約半分相当であり、まだまだ残りの部分の調査を行う必要があります。例えば、第五となりますが、円覚寺には『大般若経』六百巻があります。版本ですが貴重なもので、裏書などもあり、丁寧な調査が求められています。調査にあたっては、六百巻というのは六百冊あるということでは膨大な時間と人手が必要です。

さらに第六の「その他」とした一群ですが、文学関係書を含め、大変多くの本があります。これらの中にも細かく調べて行けば、第一～四のグループに入る書が見いだされる可能性もあり、早急な継続調査が必要になります。今回の指定は一旦の区切りではありますが、まだまだ残る多くの典籍について、引き続き調査を続けて参りたいと思っております。

◎円覚寺『大般若経』600巻



〔5〕深浦円覚寺聖教調査の沿革

今度は話題を次に移しまして、聖教調査をどのように行ってきたかという点について簡単に述べたいと思います。

弘前大学による円覚寺古典籍調査のスタートについては、先ほどもご紹介がありました。弘前大学は地域に所在する国立大学として、地域に貢献する役割を担いたいと考え、深浦町と弘前大学は連携協定を締結しました。そして弘前大学深浦エコサテライトキャンパスを開所、それに伴い、最初の記念講演を実施することになりました。この時に、ご縁があつて私がその一回目の記念講演をさせていただきました。深浦町に関する内容での講演を依頼された私は、深浦といえば円覚寺だということ、「深浦再発見！——円覚寺にみる宗教・歴史・文化の魅力——」という題名で講演をすることにしました。その準備のために皆で円覚寺をお訪ねしました時、宝物館に展示されている御本の他に、多くの御本を所蔵されていることを知らされました。その時少し見せていただいた本が、醍醐寺旧蔵の鎌倉写本だったことから、急遽、別日程で調査をさせていただくことになりました。その後、行く度に多数の本を見せていただくこととなり、個人調査で行う規模では無いと判断、本格調査に移っていくこととなりました。

それ以降、弘前大学の多くの先生方や、学生たち、次いで、木造高校深浦校舎の高校生や、深浦町民の方にもご協力・ご参加いただくこととなり、だんだんと規模の大きな調査になっていきました。深浦町役場にも協力をいただき、連携調査となったのです。

なんとといっても質量ともに大変なものでしたので、弘前大学と深浦町の連携合同調査となったのは幸いでした。このような規模を拡大した調査が可能となったのは、所蔵者である円覚寺様の寛容なお心と文化財に対する深い御理解によるもので、皆の力を借りた作業を行って構わないというご判断に支えられた点が大きいです。また度重なる調査につい

て、土日を返上し、場所をご提供くださった深浦町役場と教育委員会の皆様の献身的なお働きに支えられて実施することができました。

高校生も最初は慣れない手つきで、大変緊張して触っていましたが、すぐに扱いも上手になり、町民の方も高校生も、回を重ねた方には、新しい参加者への指導もしていただきながら、皆で合同で調査をさせていただきました。

先ほど「青森モデル」という言葉が出て参りましたが、深浦町民が、高校生からシニアの方まで、幅広い年代の方が文化財を守る活動を通じて混じりあい、温かい気持ちで一緒に調査を進めていくことができたのは、本当に楽しい日々でした。休憩時間には深浦の昔の歌を紹介いただいたり、深浦の伝承を教えてくださいたりするなど、こうしたオプシオンも調査の醍醐味と言えらると思います。ちなみに、深浦の温泉も大好きでした。写真は、高校生とシニアの方々、大学生と町民の方が様々に混じって調査作業を進めている光景になります。

調査の成果は、随時深浦町民の方に紹介したいと考え、初年度は深浦町役場でフォーラムを開催いたしました。この時には、基調講演として醍醐寺の聖教調査の調査団を率いておられます永村先生にもはるばるお



越しいただき講演をしていただきました。また、高校生も大学生も研究発表をいたしました。

この初年度は、まずは円覚寺のある深浦の会場において、深浦の皆様が円覚寺の御本のことを知っていただきたくと考えたフォーラムでした。それから、成果報告を見える形にしておくため、来場できなかった方にも提供できるようにしようということで冊子にもいたしました。これが二〇一九年三月に刊行した、『深浦円覚寺古典籍調査報告書』第一集になります。

二年目の二〇一九年度の調査は、合計一〇回ほど実施いたしました。回数を重ねて調査は進み、毎回調査は様々な発見があり、ワクワクしました。二年目の成果はさらに、広く市民の皆様提供したいと考え



③2019年度——深浦フォーラム開催@弘前——



て、二〇一九年度の調査報告会は、弘前大学を会場として、津軽の皆様に向けて発信をいたしました。深浦開催の折には来られなかった多くの方がご参加下さり、本と知識が人を介してつながっていく、「知のネットワーク」の動態を皆さんと共有したような気がいたしました。この年の特別講演には、本日お話しくださる阿部泰郎先生にお越しいただき、日本全国から見た時に、深浦円覚寺の資料がどのような位置づけになるのか、真言宗の寺院ネットワークという視点から、また修験道資料の観点から、その意義を教えてくださいました。

またこのフォーラムでは、真言宗の寺院の皆様にご協力をいただいで御法楽を行ったり、円覚寺から貴重な御本を実際に会場に運んでいただき、弘前会場にて展示、弘前大学の部屋でご来場の皆様にも、実際に貴重な御本を見ていただくこともできました。そして二〇二〇年三月には、



報告書の第二集として、この一年の調査成果をまとめております。この年は、後ほどご講演いただきます阿部泰郎先生にご尽力いただきまして、二〇一九年三月に、名古屋大学文学研究科と弘前大学人文社会科学部との間で、学術研究協力協定を締結しました。これは円覚寺所蔵聖教があまりにも素晴らしくかつ多岐にわたるもののため、弘前大学、あるいは、一名二名の研究者だけで解明できるようなものではない、共同研究を展開していこうということで研究協力協定を締結させていただきました。

ここまで順調に調査の成果も出て、活動も広がっていましたが、三年目になりますと、コロナ感染拡大が起き、二〇二〇年度は、なかなか集団で活動できない状況となってしまいました。せっかく皆様で集まり、楽しくにぎやかに行っていた調査活動でしたが、高校生や大学生が参加する調査、あるいは、町民の方に自由にお集まりいただいていた調査を実施することができなくなりました。

それでも、文化財の指定を目指す作業は地道に続けておりました。「県重宝」の申請意義を考えると、何とか皆で実現させたいと、できるこ

ZOOMによるWeb開催
2020年 (事前予約制)
11月1日
13:00~15:50
弘前大学人文社会科学部 多目的ホール

**幕末明治期における
津軽寺院と宗教文化の展開**
— 深浦円覚寺の古典籍からみえる近代 —

明治の仏教
— 津軽を中心として —
木本 文美士 先生

深浦円覚寺所蔵古典籍調査報告書
第三集

弘前大学人文社会科学部
弘前大学人文社会科学部地域未来創造センター
深浦円覚寺古典籍保存調査プロジェクト

とをできる範囲で少しずつ作業を進めていきました。少しだけの我慢と
思っていたのが、なかなか感染拡大は収まらず、今日に至るまで皆様
にお会いすることができずにいることは、本当に残念です。

そして、昨年の二〇二〇年度の深浦フォーラムは、オンラインで開催
することとなりました。三年目のテーマは、視野をさらに広げて設定し
ました。円覚寺の聖教というのは、近世以前の歴史を解明するだけで
なく、近世から明治にかけて、変革期の日本を考える資料にもなり得る
のだという視点から、日本仏教が専門で、明治の仏教についての著作
を多く書かれております末木文美士先生にご登壇いただきました。ま
た、弘前大学からも、近現代文学を研究する尾崎先生にご講演をして
いただいたところになります。この会はテーマを、「深浦円覚寺の古典籍
からみえる近代」として、時代的にも大きく近現代に開きました。

こうして三年をかけて、地域的には「深浦から弘前へ、弘前から日本
へ、そして世界へ」と広がり、また時代的にも、「中世から近世へ、そ
して近代へ」と、円覚寺の聖教や古典籍の意義について、研究も深めら
れ、成果も広げられてきたこととなります。

そして二〇二一年三月には、報告書の第三集も刊行いたしました。
そして四年目の今年二〇二一年度なのですが、全く予想に反し、今年

ZOOMによるWeb開催
2021年 (事前予約制)
9月26日
13:00~16:00

本プロジェクトによる深浦円覚寺の古典籍保存調査が連携協力する活動成
果の一環として、本年4月に「内意・外言・権徳申教類及び文書」が青森県重
宝指定を受けるにいたりしました。そこで、第4回目となる本フォーラムでは、特別講
師3名による講演ならびに意見交換をオンライン方式により開催し、その文化資
源としての価値と寺院資料調査の意義について、青森県民のみならず、ひいて
は全国の方々にむけて発信し情報共有する場をつくりました。Web開催により
弘前大学・深浦町・東京をオンラインでつなぐ、「もうひとつの地域連携発信型」
の新たな試みに、みなさんも参加してみませんか。

特別講師3名による講演

「東北は、宗教文化遺産の宝の山である。
— 奥会津からの真言寺院聖教との比較 —」
名古屋大学 名誉教授・鹿谷大学 文芸部 教授
阿部 泰郎 先生

「たからものは皆で守る
— 一人も衆人も力を合わせて —」
八戸学院大学短期大学部 客員教授
三村 三千代 先生

「昔の人がのこしてくれた文字と紙
— 深浦円覚寺の古典籍調査と青森の未来 —」
大正大学 文芸部 教授
弘前大学 人文社会科学部 教授
渡辺 麻里子 先生

主催 深浦町・弘前大学・深浦町教育委員会
弘前大学 人文社会科学部 地域未来創造センター
後援 弘前市 東奥日報社 陸奥新報社

公益財団法人青森県文化振興財団の助成を受けています

問い合わせ 右記のQRコードから申し込めます。
弘前大学 人文社会科学部 准教授 原克昭
haraki@hiroasaki-u.ac.jp
jsh@hiroasaki-u.ac.jp
〒036-8509 青森県弘前市文京町1番地 電話 0172-38-3192

2021年度 深浦円覚寺古典籍保存調査プロジェクト 成果報告会
弘前大学 深浦エコサテライトキャンパス 令和3年度特別公開講座

**寺院資料調査から
地域文化振興を考える**

— 深浦円覚寺古典籍聖教の県重宝指定によせて —

はこれまで半年、全く調査ができませんでした。調査をして取り組みた
いことはたくさんあるのに、大変残念なことでした。しかしながら、こ
れまでに集めた資料やまだ発表していない調査成果も多くありましたの
で、報告会はいたいと思っておりました。そして、嬉しいことに四
月に県重宝の指定が決定しました。これを共に皆で喜び合う機会とし
たということとで今回のフォーラムを企画いたしました。

お忙しいところ、阿部先生、三村三千代先生にもご登壇いただけると
いうことで、私もこのあと、お二人の先生方のお話をうかがうことを大
変楽しみにしております。どうぞ宜しくお願いいたします。

〔6〕 古典籍の意義と保存調査活動

残りの時間は、皆様のお手許の資料を参照していただきながら、駆け
足で紹介いたします。〔6〕と〔7〕で合わせて、「保存調査活動とは何

か」ということをお話ししたいと思います。

古典籍を保存するというのは、大切にしまい込むことだけを言いません。それも保存ではあるのですが、「この本は一体何か」ということを見つけ、認識し、意義づけること。その再認識を通じて、この世にもう一度、この令和の現代に再びお披露目することも保存なのです。さらに、利用・活用していくこともまた積極的な「保存」の考え方になります。しまい込んでおくだけではなく、その本を生かすという意味での保存というもので、こうした考え方もあるのです。

ところで「保存活動」というと、「修理する」ことを想像する方も多いようです。保存のための修理・修補もまた重要なことなのですが、保存調査活動には段階がありまして、「修理」の段階に至るまでは実はかなり遠い道のりがあります。

円覚寺ではなく、一般的な調査の話をいたしましょう。お蔵などからまず本を出します。出してきたら、長い間かけてかぶったほこりや、本には美味しく紙を食べてしまう虫もいて、虫が食べたあとの分泌物がペタペタとくっついてるのを払ってあげます。固着した紙を丁寧にめくり、剥がして、風を入れる。まずはこのようにして本を開くことから始めます。

次に、何点あるのかを確認します。一点一点の本に調書といひまして、その本が何者かということが分かるデータを記録していきます。例えば、本の縦横の寸法、これは人間ならば身長、体重みたいなものです。本の縦横の長さを測り、紙が何枚あるかを数える。こうした細かなデータを計測し、記録していきます。

次にこれら書き取った情報を入力してデータ化していきます。場合によっては写真を撮影して、記録の補助とします。

こうして書名や冊数、個別の情報を確認したことにより、全体を概観できるようになります。この段階まで進むと、やっと内容を検討したり

など、詳しく研究する段階となります。本の内容を研究するまでの前段階に、非常に多くの作業があるのです。本の内容を具体的に研究するのは専門家の仕事だと思えますが、それまでの時間がかかり手が必要な段階は、専門家ではなくてもできる仕事が多くあるのです。

市民の皆様、是非、コロナが終わったらこうした「文献資料保存調査」に興味を持っていただき、調査に参加してみませんか。そのお誘いを最後にしたいと思います。

〔7〕未来へつなぐ古典籍調査とSDGs

最近流行りのSDGsエスディージーズですが、「古典籍調査」は「SDGs」に関係ないと思われる方が多いと思いますが、実は大いに関係あると考えています。SDGsは持続可能な社会を目指すのですが、和古書など、地域が持っている文化財を調査し、保存活用していくことは、大いに重要だと思えます。なぜなら、持続可能な社会を維持していくためには、環境や食料が大事なと同じように、その地域における文化の継続も重要だからです。

先ほどもお話ししましたが、古典籍の保存調査活動には本当に多くの人の手が必要です。円覚寺の場合、大量の調査対象に対して、ここまであり得ないほどのハイスピードで調査が実施できたのは、多くの高校生、大学生、町民の皆さんが参加して下さったからです。来てくださった方々が、気持ちを込めて一生懸命に調査に取り組んでくださった結果、大変な早さで一覽データを完成させることができたのです。

文献資料調査と言いますと、自分には難しいことは分らないとか、くずし字が読めないから無理と言われることがあるのですが、和古書調査に必要な「能力」があると思えば、古典籍に対する知識や、くずし字が読めるかどうかということではありません。実は、文化財を愛する気持ち、地域のことを大切にしたいという気持ちが重要なのです。地域を

愛するそのお気持ちを是非、保存活動調査に活かしていただきたいと思
います。和古書の場合、愛情がなければ、乱雑に扱い、ピリツと乱暴に
破くようなこととなります。そうでなければ、和古書調査においては、
皆様ができることはたくさんあります。

自身が何だ、どのような意義があるのか、などということの研究する
のは研究者がやればよいのです。しかしその前に、本の縦横の寸法を測
る、紙の枚数を数える、膨大な作業があります。これは地域の文化財を
守りたいというお気持ちのある方であればどなたでもできることな
ります。

深浦の場合ですと、調査に何度も参加して下さった方もおられます。
調査の参加回数が増えたと、経験値が上がって、調査に熟達してくるこ
とになります。深浦の調査団では「古籍籍マイスター」と名前をつけま
して、調査回数によって「級」を設定してみました。すでに一級を持つ
ている方が十数名おられます。実際、参加する度にできることが増えて
いき、また、それぞれの特技・得意を活かして活動していただきまし
た。調査には、こうした皆さんのお力が必要なのです。

次の②デジタルアーカイブの話なのですが、日本全国の公共図書館や
大学図書館などで、現在、急速に進められています。青森においても、
国文学研究資料館と弘前大学の連携事業で、「津軽デジタル風土記」と
いうプロジェクトが実施されました。これは二〇一九年度で完了し、弘
前市立図書館や弘前大学教育学部のHPからWEB公開されています。
津軽の誇る歴史資料や絵図などを多く公開しましたので、皆様是非御覧
下さい。（報告書も刊行しました。）

デジタルアーカイブによって、現地に行かなくても、また現物を開か
なくても和古書の内容が見られるようになりました。日本全国、あるい
は世界中からアクセスできるようになり、今まで埋もれていた資料が利
活用できるようになったメリットは大きいと思います。ただそれを深浦

円覚寺の資料でも実施できるかとなりますと、デジタルアーカイブは、
少々リスクの伴うことがあります。お寺様の持っている經典類、聖教
類はデジタル公開には不向きであり、できないこともあるということに
なります。この点は、また後で時間があればお話ししたいと思います。

写真を撮ったらオープンにすればいいじゃないか、と思われるかもし
れませんが、しかしデータ公開を進めている寺院の一例を紹介します。例
えば、園城寺（三井寺）の場合、データ公開をする資料としない資料の
間には明確な区別があるそうです。研究の素材にしていたきたい資料
はデータ公開するが、お寺の根幹となる資料はデジタル公開はできない
そうで、こうした線引きはしっかりなさっています。資料集は出しても
デジタル公開は難しいなど、公開には様々な段階があるのです。です
が、公開・非公開はともかく、様々な活用方法はございます。

また古籍籍の課題は、筆の文字が読めないということがあります。そ
こで今、くずし字を読めるようにしようという動きが世界的に、そして
日本中でも様々な動きがあります。

例えば「くずし」などのくずし字アプリが開発されています。大変楽
しく簡単に使えるアプリです。これは無料ダウンロードできまして、ス
マホでピコピコ遊べます。今、世界中で使われていますので、皆様もど
うぞお試しください。

また、最近開発された凸版印刷の「ふみのは」というソフトがありま
す。これも非常に優れた、AIを使った翻刻の支援システムになりま
す。ちなみに三村先生の百人一首の御本『ミムラン先生のチャレンジ
百人一首』東奥日報社、二〇一八年）は、本当にきれいなくずし字のお
手本で、三村先生の詳しい解説もありますので、くずし字を学びたい方
におススメです。私はこの本をくずし字を学ぶ授業で、使わせていた
いでおります。

「8」おわりに——今後の希望——

それでは最後になります。深浦円覚寺の聖教しょうきょうが、今回、青森県の県重宝の指定を受けたわけですが、円覚寺の古典籍調査は、まだまだこれから続けていかなくはなりません。今回の指定によって、深浦円覚寺に貴重な文献が多くあることを広く知っていただくことができましたかと思えます。様々な分野にまたがる多くの種類の資料がございますので、それぞれの専門家の協力を得ながら研究を進めていき、資料の意義について、解明を深めていきたいと考えております。

それから、なんといつてもまだ調査が必要な資料がどっさりと残っておりますので、ここにぜひ皆様のご協力をいただきたいと思えます。

深浦円覚寺で活動してきた市民調査団は、今、コロナでやむを得ず中断してしまっておりますが、近い将来再開します。皆様と実際に一緒に作業できる時を楽しみにしています。

私は『大般若経』六〇〇巻（六〇〇冊）も、先ほど申しましたように、縦横を測って、紙の数を数え、そして、本の裏には色々なことが書き込まれているので、それを確認して……こういう調査を是非皆様と行いたいのです。「お祭り」と言ったらお叱りを受けるかも知れませんが、六〇〇冊もあるのですから、たくさんの方で集まって、賑やかに調査をしたいと思っています。

こうして眠れる和古書がよみがえっていく先に、青森の未来を考えてみましょう。青森は、和古書——つまり、「昔の人がのこしてくれた文字と紙」の宝庫と言えます。古典籍・古文書が本当に多くのこされているのです。私は弘前大学で古典文学の授業をし始めた時に驚いたことがあります。くずし字を読む授業を始める時に、学生に「くずし字が読めるようになったら何をしたいですか」と聞くと、学生さんは「実家のお蔵の本を読みたい」と答えました。私は思わず、「お蔵があるんですか？ お蔵に文書があるんですか？」と聞き返してしまいました。この

ような動機を述べる学生は、一人や二人ではありませんでした。このような事を言うのは、津軽の皆さんだからだと思います。東京の人間が「蔵のある家」と聞いたら、特別な由緒ある家柄の方だと思ひ、あなたはこのお方ですか？ などという話になると思ひます。

青森にお住まいの方には、「青森って何もないでしょ。」と言われることが多くありました。「何もない」どころか、実はたくさんあるということ、このことを知ることから始めていただければと思っています。最初に申しましたように、縄文遺跡やお城、ねぶたも大事なのですけれども、古典籍もまた青森にとって、大変重要な文化資源だと思います。今日お集まりの皆様のように、関心のある方々と連携して、未来に伝え、そして、活用していけたらと思っております。

これからもぜひご支援のほどお願いいたします。ご清聴ありがとうございました。

【配布資料】

〔二〇二一年度 深浦円覚寺古典籍保存調査プロジェクト成果報告会
弘前大学深浦エコサテライトキャンパス 令和三年度特別公開講座〕
寺院資料調査から地域文化振興を考える
——深浦円覚寺古典籍聖教の県重宝指定によせて——

【講演1】

昔の人がのこしてくれた文字と紙
——深浦円覚寺の古典籍調査と青森の未来——

二〇二二年九月二六日（日） 一三：三〇～一四：〇〇

（於） 大正大学二号館

大正大学文学部 教授

前・弘前大学人文社会科学部 教授

渡辺 麻里子

質問はこちらまで m_watanabe@mail.fais.ac.jp

〔1〕はじめに

①深浦円覚寺の聖教 「県重宝」に指定

・二〇二一年四月九日「青森県報」

・「円覚寺真言・修験聖教類及び文書」一二三三五点

②自己紹介

二〇〇六年四月～二〇二〇年三月弘前大学人文学部／人文社会科学部

二〇二〇年四月～現在 大正大学文学部日本文学科

二〇一七年六月 深浦円覚寺調査開始

「深浦円覚寺保存調査プロジェクト」↓調査の詳細は、報告書参照

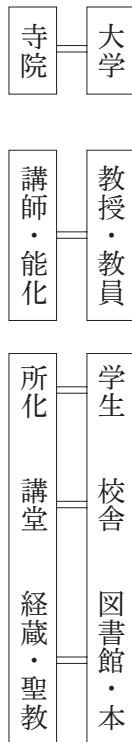
専門 中世文学、説話文学、仏教文学、寺院資料調査、文献資料学
*諸寺院の聖教調査

〔注〕聖教（しようぎょう）…仏教の経典および関連する文献

〔2〕寺院の聖教

①寺院の役割

- ・寺院は、現在の「大学」のような存在
- ・最先端の知識が集約されている
- ・蔵書は、「経典」だけではない
- ・歴史、文学、漢籍……網羅されている



②本の意味

- ・特別なもの
- ・貴重な情報
- ・人に簡単に渡さない
- ・手に入れる（見せてもらう）大変さ
- ・書き写す大変さ
- ・伝える大変さ

〔例1〕月山寺旧蔵『直雑』

・月山寺第二世尊栄はかねてから『直雜(雑々私用抄)』という本を手に入れたいと願っていた。

(天台恵心流の口決・口伝の総集、直海による編集)

・比叡山へ登山の折、念願がかない、宝徳三年(一四五二)に写させてもらうことができた。

・「随分の施物」と山王大師への祈りによる。

・ところがこの折、全部は得られず、全三四巻のうち、第一八帖の一卷が欠けていた。

・文明一六年(一四八四)六十六歳の時、再び比叡山に行く機会を得、ようやく残る一卷を求めることができた。(三十三年後のこと)

(例2) 本を写す

・奥書には、様々な感想が記される。

・「写し終わったら、明け方の鳥の声が聞こえた。」

↓書写のために徹夜をした

・「寒くて硯の水が凍ってしまい、上手く書き進められなかった」

↓高野山の出来事

[3] 深浦円覚寺の概要

①春光山円覚寺(青森県西津軽郡深浦町)

・深浦

・蝦夷地・日本海・瀬戸内海とを結ぶ、北国海運の寄港地

・弘前藩四代藩主津軽信政の時代、青森・鱒ヶ沢・十三とともに

四浦の一つとされた

・創建

・大同二年(八〇七)坂上田村麻呂が蝦夷征伐の折に観音堂を建立

・貞観十年(八六八)に、大和国の修験者円覚が再興

・宗派

・真言宗醍醐派(醍醐三宝院流)

・醍醐派：醍醐寺を本山とする

・醍醐寺(京都市伏見区)(世界遺産)

・貞観十六年(八七四)に聖宝が創建

・延喜七年(九〇七)に醍醐天皇の勅願寺となる

・真言系修験道の中心

・三宝院

・永久三年(一一一五)醍醐寺第十四世座主勝覚僧正の創建

・康治二年(一一四三)鳥羽上皇の御願所となる

・当山派修験の本山

・多くの御寺宝

・昭和五十六年(一九八一)に「円覚寺奉納海上信仰資料」が「国

重要有形民俗文化財」の指定

↓平成二十九年(二〇一七)には、日本遺産に認定

[4] 深浦円覚寺聖教の概要

①総量

・約五〇箱+『大般若経』六百卷 (十文書類)

・このうち二五箱(二一三五点)が指定を受けた

②特徴と意義

・奈良・京都の大寺院の旧蔵本が発見

・鎌倉期や南北朝期の古写本も

・修験関係のまとまった現存書群

I 聖教の古さ

- ・鎌倉、南北朝期の写本
- ・『一行禪師字母表』
- ・『三蔵法師袈裟記』など

II 奈良・京都の大寺院の旧蔵聖教

- ・『秘蔵記』『大師御行状集記』……醍醐寺
- ・『野沢血脈』……海龍王寺 など

III 修験関係資料

- ・質と量
- ・修験資料がまとまった形で残る

- ・海浦義観（安政二年（一八五五）〜大正十年（一九二二）六十六歳）
- ・円覚寺第二十六世
- ・明治十二年（一八七九）醍醐寺門跡大原演護大僧正について「恵印法流」「峰中秘訣」を受ける
- ・修験関係書の保存維持、学界への提供
- ・明治二十四年（一八九一）東京帝国大学に「修験道章疏」五〇余巻を寄贈する

- ・修験関係書の著述（『修験安心義抄』など）
- ・『日本大蔵経』『修験道章疏』の編纂に協力、当山派修験に関する底本を提供

- ・機関誌『神変』の初代主筆
- ・修験宗復興運動

……修験宗再興独立請願を文部大臣および宗務局長宛に送る

- ・尊岸（享和三年（一八〇三）〜明治五年（一八七二）、七十歳）

・津軽の諸師から伝授を受ける。

- ・津軽の廃寺の貴重な情報
- ・津軽寺院の「知のネットワーク」の解明
- ・自分自身で、切紙伝授の総編集を行う

- ・切紙・印信↓書写して冊子に ↓再度書写して編集し冊子に
- ・伝授目録も現存

(1) 切紙・印信

(2) 十六歳から十九歳ごろ……書写して冊子にまとめる

(3) 五十九歳から六十四歳ごろ

……さらに書写し冊子をまとめ直す

IV 朝鮮本

- ・第二六世義観の弟、篤弥（一八六九〜一九二四）が明治二十三年より京城に渡る

- ・京城商品陳列所の主任
- ・篤弥を介して、円覚寺に入ったものと思われる

V 『大般若経』六百巻

- ・文化五年（一八〇八）、近江屋新助が刊行
- ・奉納者を記した裏書

- ・義観の付した訓点と注記

VI その他

- ・まだまだ多数の経典、和本、漢籍類

〔5〕深浦円覚寺聖教調査の沿革

- ①二〇一七年度

・調査開始

・弘前大学社会連携課「滞在型学習」

・木造高校深浦校舎の生徒さんたちの参加

・深浦町民の参加

・全七回の調査を実施

・木造高校深浦校舎全校生徒対象「古典籍講座」の実施

・深浦町民対象「古典籍講座」の実施

②二〇一八年度

・町民、高校生、大学生を交えて、七回の調査を実施

・成果報告会の開催（特別講師：永村眞氏、深浦校舎高校生、弘前大学大学生も発表）

・報告書第一集の刊行

・名古屋大学人文学研究科と弘前大学人文社会科学部の間で
研究協力協定締結

③二〇一九年度

・町民、高校生、大学生を交えて、一〇回の調査を実施

・成果報告会の開催（特別講師：阿部泰郎氏、真言宗津軽仏教界の御
法楽、資料展示）

・木造高校深浦校舎の一年生対象「地域探求講座」を実施

・報告書第二集の刊行

④二〇二〇年度

・成果報告会の開催（特別講師：末木文美士氏、オンライン開催、弘
前・深浦・東京の多元配信）

・青森県へ文化財申請

・報告書第三集の刊行

⑤二〇二一年度

・青森県の文化財「県重宝」指定決定

・成果報告会の開催（特別講師：阿部泰郎氏、三村三千代氏）

・報告書第四集の刊行を予定

〔6〕古典籍の意義と保存調査活動

①古典籍の意義

・本の内容

・「モノ」としての本

↓本にも伝来、人生ならぬ「本生（ほんしょう）」がある

②保存調査活動

・保存

・活用と並行

・しまい込んでおくのも保存

・活用してこそ保存

・調査

・管理と保存を目的

（1）本の清掃

・埃、虫のフン、鼠のフンを払う

・本に風を入れる 「虫干し」

（2）点数の確認

（3）調書の作成

・本の寸法

・紙の枚数

・書名の確認

・書誌データを調書に記す

(4) 目録の作成、データ入力

(5) 写真の撮影

(6) 内容の検討・研究

(7) 補修・修補

〔7〕未来へつなぐ古典籍調査とSDGs

*「SDGs」

・持続可能な開発目標（英語：Sustainable Development Goals）

略称：SDGs（エスディー・ジーズ）

・一七の世界的目標、一六九の達成基準、二二二の指標から構成される、持続可能な社会を目指すための国際的な開発目標

①市民調査団

・古典籍の保存調査活動には、多くの「人手」が必要

↓文化財の保存調査活動に参加しませんか？

・「文化財を愛する」「大切にしたい」という気持ちさえあれば、できることはたくさんあります。

・古典籍の扱い方、少々のコツがあるので、それだけ学べば、特段の知識は不要です。

・調査に参加すればするほど、経験値が上がり、熟達してきます。

・「古典籍マイスター」現在一級〜三級まで。

②デジタルアーカイブ

・「津軽デジタル風土記」

・弘前大学と国文学研究資料館の共同研究事業（二〇一七年度〜

二〇一九年度）

・WEB公開（弘前市立図書館、弘前大学教育学部）

・報告書（図録）を刊行

・デジタルアーカイブの可能性

・資料による。

・リスクも伴う ↓ 公開できる資料とできない資料

・メリットは、多くの人の眼に触れること、研究の俎上に乗ること

③翻刻・活用

・くずし字のままでは読めない、利用は難しい

・弘前藩藩庁日記

・凸版印刷「ふみのは」↓AIを使ったくずし字翻刻支援システム

・KJLLA くずし字解読学習アプリ（無料でダウンロード可能）

・くずし字あぷり（無料でダウンロード可能）

・「みんなで翻刻」

↓世界中で、くずし字解読に一般参加、ゲーム感覚で遊びながら学ぶ

〔8〕おわりに——今後の希望——

①深浦円覚寺聖教の多方面からの研究

・広範囲の資料群、各専門家の協力を得ながら研究を進め、意義をさらに検討する

・多くのことが判明する可能性

②深浦円覚寺聖教の継続調査

・残る半分の古典籍

・二十五箱を約四年、残る二十五箱を……

・古文書 ↓ 歴史の専門家の協力

③市民調査団の再結成

- ・コロナで中断したが……
- ・中学生・高校生から子育て世代、働く世代、シニア世代まで……

◎深浦円覚寺蔵『大般若経』六〇〇巻（六〇〇冊）

- ・大人数で調査保存活動を行えば、楽しく進められます。

④青森の未来、地域の未来

- ・青森は、「昔の人がのこしてくれた文字と紙」の宝庫、古典籍・古文書の豊かな地域
- ・地域の文化財を守り伝えるのは、地域の人の意識と行動
- ・「当事者」である意識

- ・地元のことをもっと「知ること」 ↓ 知ること、意識することから始まります

- ・りんご、縄文遺跡、ねぶた・ねぶた、お城＋古典籍（和古書）

↓土の中からの「発掘」だけではなく、お蔵の中、納戸の中から「発掘」しましょう。

そして未来に、伝えていきましょう。

【参考文献】

- ・海浦由羽子『験乗末資海浦義観』（深浦町教育委員会、二〇〇三年）
- ・豊島勝蔵『深浦澗口観音古文書』（西北刊行会、一九八五年）
- ・深浦円覚寺古典籍調査プロジェクト『深浦円覚寺古典籍調査報告書』第一集（二〇一九年三月）
- ・深浦円覚寺古典籍調査プロジェクト『深浦円覚寺古典籍調査報告書』

第二集（二〇二〇年二月）

- ・深浦円覚寺古典籍調査プロジェクト『深浦円覚寺古典籍調査報告書』第三集（二〇二二年二月）

- ・日本大蔵経編纂会編『修験道章疏』第一～三巻、解題編（国書刊行会、二〇〇〇年再刊）

【拙稿】

- ・「天台仏教と古典文学」『天台学探尋——日本の文化・思想の核心を探る——』法蔵館、二〇一四年）
- ・「学僧の教育——中世の天台宗における学問を中心に——」『文学・語学』二〇九号、二〇一四年四月）
- ・「法華経の講会・論義・談義書」『法華経と日蓮』（シリーズ日蓮 第一巻）春秋社、二〇一四年）
- ・「尊舜談『天台伝南岳心要見聞』について」『大久保良峻教授還暦記念論集 天台・真言諸宗論攷』山喜房仏書林、二〇一五年）
- ・「談義所における聖教と談義書の形成」『学芸と文芸』（生活と文化の歴史学9）竹林舎、二〇一六年）
- ・「廬山寺談『三大部見聞述聞』の享受に関する一考察——付・「翻刻」叡山文庫戒光院蔵『三大部述聞見聞目錄』——」（弘前大学人文社会科学部『人文社会科学論叢』創刊号、二〇一六年八月）
- ・「地域における書物の集成——弘前藩主の所持本から地域の「知の体系」を考える——」（『資料学の現在』（シリーズ 日本文学の展望を拓く5）笠間書院、二〇一七年）
- ・「弘前の寺社をめぐる——最勝院と報恩寺・袋宮寺をあるく——」『大学的青森ガイド——こだわりの歩き方——』（昭和堂、二〇一九年）
- ・「天台の論義書と談義書——『法華経』『三大部』を中心に——」『日本仏教と論義』（龍谷大学アジア仏教文化研究叢書13）法蔵館、

二〇二〇年)

・「中世における園城寺の学問と談義——尊契を中心に——」

『天台学報』六二、二〇二〇年一〇月

・「園城寺の学問世界——園城寺勸学院聖教を基点として——」

『説話文学研究』五六、二〇二二年九月

〔注〕本資料は、フォーラム当日に配布したA4横書の資料を、本報告書掲載用に、縦書に体裁を直したものである。